

窓のある風景



河原 多恵子 (かわはら たえこ)
アナウンサー

岩見沢市生まれ。北海道立札幌北高等学校、北海道女子短期大学体育科を卒業し、北海道放送(株)へアナウンサーとして入社、数々の番組を担当。2011年、第48回ギャラクシー賞ラジオ部門大賞受賞作、ラジオドキュメンタリー「インターが聴こえない～白鳥事件60年目の真実～」のナレーション担当。2012年2月からフリーランスとして活動、朗読会や言葉のワークショップなど開催。HBC-R「多恵子の今夜もふたり言(毎週日曜21:00～21:30)」パーソナリティー。

「窓」と書いて、アルフレッド・ヒッチコックが製作監督した映画、「裏窓」を思い出しました。1954年のアメリカ映画、出演はジェームズ・ステュアート、グレース・ケリー。物語はニューヨークのアパートの一室、足を骨折して自宅で療養中のカメラマンが、退屈しのぎに部屋の窓から向かいのアパートの住人を観察するうち、ある部屋で住人の妻の姿が見えなくなったことに気がつきます。不審な行動をとる夫をめぐる推理を展開し、いつしか事件に巻き込まれていくというサスペンス・スリラー。どこにもある「窓からの眺め」がきっかけで起こる緊迫の展開に引き込まれ、グレース・ケリーの美しさに何度もため息をついた映画です。乗り物でもレストランでも窓側を好む方が多いようですね。眺めの良さ、光の加減、専有感など窓側ならではの快適さは魅力的です。以前、オーストラリアへ行く飛行機の席が窓側で、眼下にハート型のサンゴ礁を見つけたときは、特等席に感謝しました！しかし、窓側の居心地が良過ぎると・・・？講義中にぼんやり窓の外を眺め、来し方行く末に想いめぐらし夢見心地。突然、教壇から名前を呼ばれ、ハッとした経験もあります。油断なさいませんように。

窓のある風景

「窓のある風景」と「窓から見る風景」、どちらも好きです。「アルテピアッツァ美唄」は美唄出身の彫刻家・安田侃^{かん}さんの作品と向き合える場所、思い立つと出かけます。美唄駅前からバスで約20分行くと、山あいには赤い屋根の木造の建物が見えてきます。大自然の中につくられた野外彫刻公園と、廃校になった旧栄小学校の校舎を利用したギャラリー。ここで過ごす、必ず、子どもの頃を思い出します。芝生で寝そべったり、でんぐり返しをしたくなる、廊下は静かに歩きましょうなど、どこか懐かしい気持ちになって「その場」と対話、時間のたつのを忘れてしまいます。ですから帰り道は、あわててバスに飛び乗ることになるのですが！初めて「アルテピアッツァ美唄」を訪ねたのは夏でし

た。野外彫刻を巡ってギャラリーに入ると、窓から風が舞い込み、午後の光が廊下や壁に窓の影を映して、もう一つの窓が出現。思いがけない光のシルエットに驚きました。私の窓へのラブコールはこの時から始まったかもしれません。旅先でも真っ先に目がいくのは、建物の窓やガラスです（笑）。時どき、HBCラジオ第2スタジオ副調整室の窓から空を見上げています。北向きの大きな窓がフレームの役目を果たして、素晴らしい眺めが誕生。ある日は青空に白いペンキをサッと塗ったような雲が浮かんで、とてもきれいでした。こんな時、窓から見る風景に心をグイと持ち上げられた気がします。

みかん 蜜柑

「汽車の窓からハンケチ振れば〜」、この歌詞ではじまる「高原列車は行く」は歌手岡本敦郎さんの代表曲です。汽車の窓が開け閉めできた当時を知っている皆さんは、窓を閉めれば夏は暑い、開ければススで真っ黒、窓越しの出会いと別れ、駅弁談義など話つきなんでしょう。汽車のガラス窓が重たくて開閉に手間取った経験は私にもあります。

芥川龍之介作『蜜柑』。この小説は、汽車の窓で起きたことを書いています。短いものですが、読むと情景が広がって、清々しい気持ちになる作品だと思います。久しぶりに『蜜柑』を読みました。二等客車・三等切符・停車場・^{ばいえん}煤煙など、今では聞かない、しかし、記憶のどこかにある懐かしい言葉がいくつも登場します。そして、横須賀の地形はトンネルが多いことや、4人掛けの客車だったこと、汽車の窓が開くことまでわかりますから、読書好きのみならず、鉄道ファン、鉄男・鉄子さんも大喜びの小説に入るのではないのでしょうか。でも、若い世代からは、本を貸してもすぐに「意味わかんない〜」と返されそうで、ドキドキしますが？

「蜜柑の主人公は、汽車の中で自分の前に座った娘が、もうすぐトンネルに入るといふのに窓を開けよう

と必死になっているのが不愉快で、開かなければいいと思っている。が、トンネルに入ると同時にとうとう窓が開いて、車内に煙が立ち込めた。しかし、娘はそれに頓着しないまま、身体を乗り出すようにして窓の外を見ている。トンネルを抜け、汽車が町はずれの踏切にさしかかると、そこには喚声を上げ、手を振る三人の男の子がいた……。読み終えると、それまでのモノトーンだった情景がみかん色に変わっています。そして、娘がどうしても窓を開けたかった理由や、多分これから奉公先に向かう娘の覚悟、残していく弟たちへの心情がみかんの色と重なって、窓とみかんが在り来たりなものでなくなっていくのです。芥川龍之介って、こうだったあ……。『蜜柑』を初めて音読した友人の感想です。なお、小説の続きは本を読んでいただければと思っています。ここでネタバレしては、私はオシャベリなひとになってしまいます（笑）。芥川龍之介作『蜜柑』。みかんの季節に朗読する予定です。



HBCラジオ第2スタジオの窓から